

趣旨説明と継承問題

京都大学 高等教育研究開発推進センター・准教授

溝上 慎一

京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上と申します。本日と明日、二日間よろしくお願ひいたします。朝、京都は快晴でして、今日は快晴に恵まれて…という話をしようと思っていたのですが、激雨となってしまいました。田中先生からもお話がありましたが、足場の悪い中ご参加くださりまして誠にありがとうございます。また、今日と明日、プログラムの中で登壇される先生方には、お忙しいなかご都合をつけてくださったこと、厚くお礼を申し上げます。

特に立命館大学の加藤敏明先生には、このあとのパネルディスカッション第一部と明日のパネルディスカッション第二部の企画において、お知恵を拝借しました。合わせてお礼を申し上げます。

また、電通育英会の関係者の皆様方にも、この場を借りて厚く御礼を申し上げたいと思います。本当に、これだけのフォーラムを実現するには先立つものがいりまして、お金なんですね。そういう支援をいただいて、また企画の段階からいろいろと一緒に議論を進めてきて本日を迎えております。

昨年第一回を8月にやりまして、すぐに計画を始めたわけではないのですが、一か月二か月開いて、十月くらいから約1年かけて本日のプログラムを計画してまいりました。その過程でいただいた支援というのは、今日なんとか内容として反映させないといけないと思ひて、そういう意味でも、このフォーラムにご支援いただひて感謝してあります。

さて、少しお時間をいただひて、このフォーラムの趣旨、あるいは昨年から継承している課題がありますので、それについて申し上げます。まず、この大学生研究フォーラムというのは、大学生研究プロジェクトという、電通育英会と京都大学のセンターで進めているプロジェクトの一つの柱です。2007年からスタートして、そのうちのひとつが大学生調査です。

大学生調査というのは、特にここで言っているのは、全国調査です。最近では2、3大きな調査が出されるようになってきましたが、大学生の実態を全国でつかむ取組みというのは遅れてありまして、アメリカではもう40年近くの歴史があるんですね。それを日本でも、遅ればせながら同じような形ではできませんけれども、やっていきたいというのが一つ趣旨であります。

大学生調査が全国でなされるようになってきたとは言ひましても、それは実施主体によって、目指す理念ですとか、今後どのように向かっていきたいとか、あるいは学生の学習観をどういふふうにとらえるのかとか、そういった立場がいろいろとあるんですね。

私たち京都大学と電通育英会のプロジェクトとしては、学生の、広い意味での学びと成長というのを考えていきたい。そういう考えのもとになされている全国調査であります。

これは3年サイクルでなされるように計画されてありまして、一年目に全国調査。これは昨年、参加されたかたは報告書でお配りしたとおりですけども、電通育英会のホームページに PDF で報告書を掲載してありますので、合わせてご覧いただければと思ひます。

ともかく、3年サイクルの中で1年目に全国調査を行ひまして、同じ項目で3年ごとにとつていくというもので

す。いま3年サイクルの2年目を迎えておりまして、その2年目は、全国調査の分析の中で出てきた課題、あるいは昨年のフォーラムで議論されて出てきた課題などをもとにして、ある課題に特化した分析をしていきます。

この報告が、先ほど松本理事長がおっしゃっていた、明日報告いただきます労働政策研究・研修機構の下村先生による調査であります。下村先生には、2年目の調査のデザインから分析からまとめまでお願いいたしまして、良い結果を出していただいています。その報告は、みなさんのお手元にも報告書がありますが、その報告を明日させていただきます。このように、2年目は課題に特化した調査を行っていきます。

先ほども理事長から簡単なお話ができましたけども、やはり、対人関係が重要だということを確認したのは一つポイントであります。この調査は、1年目にやった1年生と3年生が対象だったんですけども、その3年生の学生が一年後に就職活動をどう迎えたかというなかで実施された縦断調査なんですね。3年生のときにどういいう大学生活を過ごしているかとか、あるいは学業も含め、将来をどう考えているかなど、もう片っぱしから聞いていますので、そういう学生の3年生のときの状態が就職活動にどう反映したかということ今年調査して、先ほど言いました下村先生にご報告いただくわけです。この結果の中で、やはり、対人関係力といえますか、対人関係の力というか効果というのは大きいと確認されたわけです。

他方で、これは私たち高等教育センターでは非常に大事な結果として受け止めておりますけども、勉強もしているんですね。こういう学生群がやはり就職を良い形で決めている、という結果であります。

また詳しくは下村先生からご報告いただきます。で、3年目はお休みです。

この3年サイクルを回して行って、できれば10年やっていきたいなど電通育英会の関係者とはお話しています。予算の問題とかありまして、どこまでやれるかはわかりませんが、こういう同じ項目で、あるいは課題を継承しながら調査を継続していきたいというのが、この大学生研究プロジェクトの一つの柱であります。

もうひとつの柱は、この大学生研究フォーラムであります。大学生調査は、概して調査それ自体の意義で進められる傾向があります。私たちは、大学生の現状を把握しつつ、それを現場とつなげたいわけなんです。その現場とつなげるところをどうするか、いろいろ見えていますけれども、なかなか、調査一辺倒の方々、それから実践一辺倒の方々、こういう極端に分離した中に多少グレーゾーンの方がいらっしゃいますけども、全体としましては、やはり調査結果と実践とをつなぐ取組というのは弱いと私は見てきました。

そこで、電通育英会の関係者と議論を進めるなかで、調査だけではなくて、この調査の結果、あるいはこういう議論もふまえて、フォーラムをやってほしい、やっていかなければならない、とこういう形で二本目の柱として大学生研究フォーラムを実施することになったわけなんです。

ですから、調査の結果をどういう風実践にインプリケートしていくのか、これが昨年の中心課題だったんです。こういう点を非常に大きく意識しております。調査だけが研究ではありませんし、広く大学生研究というときには、調査だけでなく他国の状況であるとか、あるいはこれまでの歴史的な経緯であるとか、そういった理論的なことも含まれますので、そういう意味では、ここでは研究／調査、とひとつにまとめて、それと実践との架橋をする。これがこのフォーラムでのひとつの目的であります。

今日のパネルディスカッションも、そういう趣旨に基づいて計画されております。

他方で、いまちょっと申し上げましたけども、継承ですね。大学生の議論というのは全国でもいろいろなところでなされていて、それはテーマを変えてさまざまあります。ただ、昨年議論された課題とか、問題になっていることが、その次の年に議論されない、あるいは扱われない、ということが結構あるんですね。それは担当者が代われば、場が変わるみたいなもので、どうしても課題を深めていくということが弱いという現状がありますし、私もその点をずっとなんとかしたいと思ってこれまでまいりました。

ですから、この大学生研究フォーラムというのは、京都大学と電通育英会の共催で進めていくものでありま

すけども、できればこれをずっと続けていき、昨年の課題、あるいは年数を経ればもっと前の課題がいろいろ蓄積されてきますので、そういったものを私の方で集約しながら、次の年、次の年、と課題を検討していきたいと思っています。

ですから、このあと課題のお話もしますが、課題の継承ということがこのフォーラムの非常に重要なポイントであります。この課題のなかには、調査をいろいろ分析したうえでの課題もありますし、皆様から議論をいただきました。昨年も、一日でプログラムを詰め込みすぎてあまりフロアとの議論の時間をとれなかったんですけども、今年はずいぶんとれるように時間をとっておりますけれども、それでも昨年は、会場に集まっていた方から、ものすごくたくさんのコメント、建設的な批判も含めていただいたんです。そういうものが、今年非常に大きく反映されております。もちろん、いただいたものすべてを扱うことはできませんので、そういう意味では一部ではありますけれども、ただこのフォーラムだけが課題を扱っていく場ではありませんので、そういう意味ではいろいろみなさんとやり取りしながら課題を作り、来年以降の課題として継承していくことを目的として考えています。

このフォーラムのプログラムは、皆様お手元でござらんとおり、基調講演があって、パネルディスカッション、これは課題を中心に組んでおりますけれども、パネルディスカッションの第一部と第二部、それから4人の方の講演、こういう構成で進めております。

特に講演のところには狙いを入れておりますので、それを申し上げておきます。まず、ここに来ないと聞けないような方をできるだけ呼びたいと思っています。先ほど申し上げましたように、大学生研究とか、あるいはキャリア教育というのは、いろんなところで、学会もたくさんありますし、各大学でなされているシンポジウムとか、取組でいえば、もうそれはいっぱいあるんですね。毎週2〜3はどこかでなされているという印象があります。ですけども、そういうところではなかなか登壇されないけれども、大学生の広い意味での学びと成長ですね、そういった広い意味での学生の、大学にかかわってなされる活動と成長、こういうものに関わって非常に重要になる先生方のお仕事をこの場で紹介したいわけです。

昨年であれば、渡辺三枝子先生、キャリア教育の大御所の先生ですけども、渡辺先生にはこういう依頼をしたんです。キャリア教育の話は、実践の話ですとか最近の中教審の取り組みとかはもういいので、歴史の話をしてください、と。アメリカで職業指導とか職業教育とかいっていた時代から、キャリアという言葉が70年終わりから80年代に出てくるわけですね。そういうことがアメリカの社会の中でどういう経緯をもって出てきたのか、そういう歴史の話をしてください、と。で、実際にそういうお話をいただきました。

こんな講演は、授業とか専門書ではなされていますけれども、こういう実践的な大会の場ではなかなか聞けないお話ですよ。また参加者の中には、こういう場でいろいろ学んでおられる方もおられます。そういう意味も含めて、歴史とか、あるいはこの場で学べること、そういうことをお話いただくよう、講演の先生方をお願いしております。

今年でいうと、この手の話の最たるものはたぶん辻本先生だと思います。辻本先生には江戸の学び、というのをお話いただきます。たぶん、辻本先生に会いたいと思っても、ここに座ってらっしゃる方は会えないと思います。教育史学会とか教育学会に行けばいつもいらっしゃいますけれども、こういう大学教育とか、あるいはキャリア教育などの場合ではいらっしゃらない先生です。辻本先生には、江戸の学びを、あまり大学教育とか現代の大学生とかを気にせずお話しください、とお願いしております。つなげていくのは私たちですので。先生は江戸の学びを、特に身体性ということをキーワードとしてお話いただけたと思います。やはり人とふれあいながら学ぶ、あるいは素読といって、意味を考えずに学ばうんですね。特に漢籍の学習なんかはそうだったんですけども、意味を考えて学ぶ私たちの現代の学び方とか教育とは違って、訳が分からなくてもとにかく読むんです

ね。で、読む中で、あるいは体との、特に師匠とかですね、他者との体と体を通して学んでいくような、体を媒介にして学ぶようなお話をされると思います。こういう話をぜひここでしていただきたい、そうお願いして今日は来ていただいています。

まあ、なかなかこういう場で辻本先生のお話を聞きたい、というふうにはみなさんならないんですけども、それでも申込の段階では50から100名くらいの方が参加されると聞いておりますので、私としてはこれだけ集まれば十分だな、と喜んでいるんです。こういうのが一つ講演の目玉です。

他方では、浦坂先生とか谷内先生なんかは、労働経済学のご専門ですけども、この方々も大学教育ではなかなかお見えにならない方ですけども、たとえば谷内先生には、企業の中で最近変わってきている雇用システム、特にプロフェッショナルとか、そういうところがどうなっているのか、という雇用システムのお話をさせていただこうと思います。谷内先生は、実は大学教育のキャリア論も結構ご著書を書かれていて、単に雇用システムだけを扱っている研究者ではないんですね。こういう方が雇用システム論というのを出されるとするのは私は非常に意味があると思っていて、もう谷内先生にぜひお願いしたいと思って今日は来ていただいているわけです。

で、浦坂先生もですね、ご存じの方はいらっしゃると思いますけれども、学力調査で、特にうちの西村先生なんか、分数のできない大学生とか、そういうことで学力調査をされましたけども、ああいう流れのグループとしてずっと研究されてきた方です。私に関心をもってきたのもそういうテーマなんですけども、たとえば大学受験で数学を選択してないで、将来の収入が変わる、なんて話は俗っぽくはありますけれども、その背後に何があるのかということ突き詰めて考えることはたいへん興味深いことです。浦坂先生には最近出されたご著書の内容を中心に、今日はお話いただこうと思ってお願いしております。端的に言って、正課教育での学びがキャリア教育にもなるというお話です。

キャリア教育というと、キャリア教育だけで専門の方がやっていく、ということになりがちなんですけども、実は一般の教員、あるいはもちろん大学を構成する教職員全体で学生のキャリアということを考えていかなければならないわけで。そういうものをダイレクトに提示してくださった、という意味で私なんかはその著書が出てきたときに喜んだんですね。私はもうずっとその点を主張しているつもりであります。とにかくキャリア教育と言わないキャリア教育ですね。大学教育のいろんなプログラムを通して、学生の学びと成長を考えていく。そういうところひっかけてご提言いただく先生であります。

さて、昨年からの継承として、三つ今回取り上げております。ひとつは、学生の学びと成長を大学教育、キャリア教育として実践的に考えていくうえで、対人関係。これはさきほど追跡調査で、下村先生のご報告の中でも、対人関係と学業志向、この二つが二軸としてあがってきましたけど、そのうちのひとつです。改めて確認するまでもないんですけども、やはりこの対人関係というファクターが、昨年のフォーラムでは、まったく異なる立場の何人かの先生から同じようにご提示されました。つまり、やはり大学生の学びと成長を大きく考えていくときに、どうしても、正課教育にかかわる方であれば勉強ばかりに意識が向かいますし、キャリア教育の方であれば社会とか職業とかそういう話ばかりになるんですけども、そういったものを下で繋ぐファクターとして対人関係が強く打ち出されました。

実践を中心に据えたこのフォーラムでありますので、学生の対人関係力を育てるというようなダイレクトな課題設定ではなくて、知識を学ぶ場、課題を遂行する場があって対人関係の力を育てていく、そういう場や活動をどういう風に作っていくか、という観点で読み直し、これを後で扱っていきます。

フォーラムに学生の声や体験がほしい、これはフロアからたくさんいただいたコメントであります。これも第一部パネルの方で合わせて実現いたします。

で、真ん中の大学生調査の分析、3年サイクルの1年目の全国調査でありますけれども、昨年報告いたしました、もっと学部とか大学のレベルとか、そういったものを考慮した結果を見せるべきではないかと意見をいただきまして、それはまったくそのとおりでありまして、時間があるようでしたら最後に少しだけお示したいと思いません。以上のような課題を今回は取り扱っていききたいと思います。

このあと、すぐに第一部のパネルディスカッションに入っていきますけれども、さきほど言いましたように、対人関係ですね、それをどう鍛えていくかというところで、教育実践、加藤先生からはインターンシップ、岩井先生からはボランティア、土持先生からは正課教育の中での授業、こういった活動を通して学生のどこを育てようとしているのか、という議論をしていきたいと思えます。対人関係の力を育てることを、こういう「活動の場のなかで」として考え、第一部のパネルを組みました。

フォーラムに学生の声や体験がほしい、というのも、ささやかながらですけども考慮しまして、時間の関係で学生おひとりですけどもお連れいただいて、ご報告いただくようお願いしています。

他方で、これは最初に申し上げましたこのフォーラムの趣旨で、研究と実践をつなぎ合わせる、ということですけども、やはりこういう研究の観点からすると、何を学んでいるか、というのは結構議論できるんですけども、何を学んでいないかという議論は難しいんですね。これは後でパネルの趣旨説明をするときにも簡単に触れますけれども、やはり何が育っていないか、ということも議論できるようなふくらみというか発展可能性がないと、実践というのは豊かにならないというふうには私考えております。

それで今日は、学習マトリックスを使って議論してみようと思えます。初めての試みですので十分なものになるかわかりませんが、こういうことにチャレンジしてみたいと思えます。

第二部のパネルディスカッション「学生の『学ぶ』を育む——経験知と専門知との往復による融合」の企画については、とても難航しました。加藤先生にもずいぶんお知恵をいただきました。活動が大事であることを否定する人はいないんですけども、そこで学んでいることが何かを突き詰めていくことも、他方でとても重要なわけですね。経験知、あるいはその体験ということを経験だけで終わらせない、体験したことをどこかでどのようにまとめていくか。それはリフレクションしていくということでもありますけれども、もっといえば、やはりその体験と勉強とを行ったり来たりするような循環ループというのを活動の中に込めていく、そういったことをメッセージとして考えております。

今回は中村先生ともいろいろ議論させていただきまして、専門知という言葉を使いました。勉強は、別に教室の中での座学という狭い意味ではなくて、それも含めて、自分で必要だと思う知識や情報を調べたりしながら獲得するということです。そういう実践とつなげて教室で、教室外で勉強することを指しています。日本が非常に弱い部分です。そういう意味での、体験と勉強との間を行ったり来たりするような活動、そういったことをテーマにしようとしてこの第二部を企画しています。

中村先生なんかは全くその通りだとおっしゃっていただきましたけれども、やはり体験が体験だけで終わるとするのは、浅いんですね。その体験を抽象化して、たとえばそのテーマにおいていま世の中で議論されていることをいろいろすり合わせて理解する、あるいは、いままで学んできたこととどう関連するのかといったところをすり合わせて学ぶ。そういう時間とか場が必要でありまして、そういう意味では体験と勉強とがいたりきたりしないといけない。そういうことが教育実践のなかでどのようになされるかを議論してほしいと思って組んだパネルディスカッションであります。

ただ、実際に、実践をいろいろされている方の中で、体験を振り返って学業まで戻ってくるような取組というのは、私が一年間調べた中でも本当に少なくはなくてですね。もっと時間をかければあるとは思いますが、なかなかたどりつかなくて。ようやく中村先生をはじめ三名の先生方をお願いすることができました。この手のテーマ

はまだまだ私はこれから議論されていくべき新しい課題だと思っていますので、課題はたくさんあると思います。ただそういうところに向かう実践として、明日ご報告いただきますので、そういう感じでお聞きいただければと思います。

三つ目の学部とか大学のレベルを反映した分析結果ということをいろいろお示したいんですけども、昨年議論された2つのライフですね。私はこれを、非常に大事にしているんですが、つまり将来の見通しを作っていくというのはキャリア教育では大きなテーマになっております。しかし他方で、それを日常でつなげて実践するということは非常に弱いんですね。これは簡単な調査でありますけども、昨年結構大きなテーマとして議論していただいたんですけども、将来の見通しを持っているか、と学生に尋ねたら7割の学生は持っていると答えてくるんですね。これはどういう形で聞いても、だいたい7割くらいの学生は、持っていますと答えています。だけれども一つの問いとして、それを日常でどういうふうにつなげているか、と聞いてみます。つまり、持っている、という学生に、日常で何をやっていいか理解しているか、あるいは理解した上で実行しているか、という問いを重ねて聞いていきます。そういう風に調査していきますと、日常でもつなげて理解・実行できているのは、これでいうと 35.5%です。で、半分の学生、51.9%は何をやっていいかはわかっているけど、日常ではできていない。12.6%の学生は、何をやっていいかもわからない。つまり、頭の上で将来何をやりたいか、ということを考えているだけなんです。

で、昨年の議論の一つとしては、あまり将来を日常につなげすぎるのはしんどい、と発言された先生がいらっしゃいました。私はそれは全くその通りだと思います。そんないつもいつも将来のことを考えて日常を過ごしていたら気が狂います。だけどそれは程度の問題がありまして、やっぱりどこかで将来と日常とを行ったり来たりしながら日々を過ごす、大学生活を過ごすことが大事だと私は考えます。これが二つのライフ、というものの提言の意味であります。

それを専門別と大学別でちょっと分けた結果をお示して、趣旨説明を終わりたいと思います。専門別でいいますと、やはり将来の見通しは、医歯薬系は非常に多いですね。で、理科系では見通しを持っていないというのが多くなっています。二つ目の方、日常でつなげてやれているか。医歯薬系は有意差が出ています。他の群に比べて、日常でつなげてやれていると。理科系の方は、何をやっていいかはわかっているけども、日常ではできていない、あるいは不理解ですね。何をやっていいかわからないという部分が他の群に比べて有意差がでています。

次に偏差値別です。こういうのも大事だと思います。ただ、二つのライフに関しては、数字の上では偏差値の高い大学群で数字が上がっておりますが、統計的には有意差はでていません。日常とつなげる方でも、有意差はありません。

本格的な細かい結果などは近々レポートしていく予定ですので、もしご関心のある方はメールをくだされば、公開されたときには差し上げますし、asagao メーリングリストという、このフォーラムを案内している京都大学のセンターのメーリングリストですけども、そちらでも、公開されたときにはご連絡差し上げますので、遠慮なく、ご関心のおありの方はご連絡ください。

それでは、これからパネルディスカッション第一部に移ります。ありがとうございます二日間、どうぞよろしくお願いたします。